

**サムエル記上、下における五人の主要な人物に見られる、
良き地の享受に関する**

霊的な原則、命の学課、聖なる警告

聖書：サムエル上 2:27-30, 35, 3:21, 12:3-5, 23, 18:1-4,
23:16-18, 9:1-2, 17, 13:13-14, 15:19, 23, 16:1, 12-13,
30:6 後半-10, 26:19 後半, サムエル下 11:1-27

- I. エリの下で古いアロンの祭司職は古びて衰退したので(サムエル上 2:12-30)、神は新しい開始を持って、ご自身のエコノミーを完成することを願いました：
- A. わたしたちはみな、腐敗、古さ、生ぬるさ、高ぶりの一切を拒絶し、主に對して空^{から}で、開いており、新鮮で、新しく、生き生きとして、若くあるように自分自身を保つ必要があります。わたしたちは彼の願いと一となる必要があります。彼の願いは、わたしたちがキリストと一となり、キリストで満たされ、キリストによって占有されて、キリストを生き、キリストのからだを有機的に建造することです——啓 3:15-22, ルカ 18:17, ピリピ 3:7-14, ガラテヤ 1:15-16, 2:20, 4:19, エペソ 4:16。
 - B. エリの時代に神の言葉はまれでした。神の語りかけはほとんど失われていました(サムエル上 3:1)。祭司職において、祭司が行なうべき第一の事は、神のために語ることです(出 28:30)。祭司は神と親密であり、神と一であり、神の心を知っており、神の永遠のエコノミーの唯一で健康な教えを語り出す人でなければなりません(I テモテ 1:3-4, 6:3)。
 - C. エリはサムエルに、主に対してこのように言うように教えました、「エホバよ、お話しください。あなたのしもべは聞いております」。主のために語り、主と一となって彼の永遠のエコノミーを遂行するために、わたしたちはまず彼の語りかけを尊び、注意深く聞かなければなりません。それによってわたしたちは彼の願いと好みを知ります——サムエル上 3:9-10, 21, イザヤ 50:4-5。
 - D. エリは祭司職を軽んじ、自分の二人の邪悪な息子を取り扱うことで怠慢でした(サムエル上 2:28-29)。これが彼の歴史の終わりの悲劇を引き起こし、彼が良き地を享受することを終わらせ、神聖な啓示における、すなわち、神のために語ることににおける祭司職の衰退をもたらしたのです。今日わたしたちはエリから、神が彼の回復の中でわたしたちに与えられたものを尊重することを学ぶ必要があります。
- II. サムエルは、神が与えたサムエルの身分と職務のすべてにおいて、神に對

して忠信でした：

- A. レビ人として、彼は全生涯、神に仕えました。ナジル人として、彼は失敗することなく自分の献身を守りました(サムエル上 2:35)。祭司・預言者として、彼は神のために誠実に語り、預言者職を開始し、神聖な啓示において衰退しつつある祭司職を置き換えました。士師として、彼は神に対して忠信であり、民に対して公正であり、士師職を終わらせ、王職をもたらして、時代を変え、神のエコノミーを成就するようにしました。
- B. サムエルは、神と共に働いて彼のエコノミーを遂行した者として(ヨハネ 5:17、Ⅱコリント 6:1 前半)、エホバの言葉を聞くことによって、エホバの預言者として立てられて、彼のために語りました(サムエル上 3:9-10、20-21)。わたしたちは絶えず自分自身を訓練して、「その霊が諸召会に言われることを聞く」耳を持つ必要があります(啓 2:7)。さらに、わたしたちは「主の足もとに座って、主の言に聞き入っていた」マリアの模範に従う必要があります(ルカ 10:38-42)：
1. マリアは「主イエス」の足もとに座っていました。他のだれの足もとでもありませんでした。時々刻々、主に来て、主を愛し、主を礼拝し、絶えず主と交わり、主の臨在の中にとどまることよりも良い方法はありません。
 2. マリアは主の「足もとに」座っていました。彼女は自分自身をへりくだった地位に置き、主の語りかけを聞き、主の祝福を受けました。へりくだることは、自分自身を見下げることではありません。へりくだることは、自分自身を見ないこと、自分自身をなくすこと、自分自身が無であると考えることです。
 3. 彼女は「座って」いました。主の臨在からそらされるほどに忙しい者たちは、さまよう思いと定まらない考えを持っています。彼らは自分自身を停止し、日ごとに主と個人的な時間を費やさなければなりません。
 4. 彼女は「主の言葉に聞き入って」いました。主がわたしたちに語る言葉は霊であり、命です(ヨハネ 6:63)。彼女が主の言葉に聞き入っていたことは、主がご自身を彼女に伝達し、ご自身を彼女の中へと分与する機会を主に与えました。それによって彼女は主ご自身を得ることができました。
- C. サムエルは全生涯、良き地の自分の分け前の最も満ち満ちた享受を持ちました。ですから、新約の意味で、彼のキリストに対する享受には何の欠点もなかったと、わたしたちは言うことができます。サムエルの歴史における唯一の欠点は、彼が自分の二人の子をイスラエルの子たちの間で士師と

して立てたことです——サムエル上 8:1-3 :

1. サムエルの子たちの不公正な道は、彼らの父の全生涯における純粋で公正な道と正反対でした(12:3-5, 23)。イスラエルの民はこの事によって、サムエルに対して、すべての諸国民のように彼らを裁く王を立てるように要求する口実を得ました(8:1-7)。ですから、サムエルの子たちは、イスラエルの民の間で士師と認められず(使徒 13:20)、彼らの父サムエルが最後の士師と考えられるべきです。
 2. 人から言えば、サムエルはこの事で間違いを犯しましたが、この間違いは神を助けて王職をもたらすことによって、神の民の間で状況を管理し、神のエコノミーを完成するようにしました。
- Ⅲ. ヨナタンはダビデを愛し、ダビデと契約を結び、ダビデが王となり、王国が彼の王国となると予告しました——サムエル上 18:1-4 . 19:1-7 . 20:8 , 14-17 , 41-42 . 23:16-18 :
- A. サウルの意図は、ヨナタンのために王国を維持することでした。しかしながら、ヨナタンは進んで王国を取ろうとしないで、ダビデが王座に就くべきであることを承認しました。
 - B. ヨナタンはこれについて父に告げるべきであり、そして父を離れてダビデと共にいるべきでした。予表において、ヨナタンがダビデに従うことは、今日わたしたちがキリストに従い、彼に首位になっていただくことを表徴しました——コロサイ 1:18 後半, 啓 2:4。
 - C. ヨナタンは、神が約束された良き地における彼の分け前の正しい十分な享受を失いました。それは彼の父に対する天然の愛情のゆえに、神のみこころにしたがってダビデに従おうとしなかった彼の失敗のゆえでした。ヨナタンは、ダビデが王となることを認識していましたが、父と共にとどまりました。悲劇的な結果として、ヨナタンは父と同じ終局を迎え、父と共に戦場で死にました——サムエル上 31:2-6。
 - D. ヨナタンはサウルとダビデの間に立っていました。彼は二つの務めの間に立っている一人の人でした。彼は第二の務めに従うべきでしたが、第一の務めに対する彼の関係があまりにも深かったので、彼は逃れることができませんでした：
 1. それぞれの時代に、主には達成したい特別な事があります。主には彼ご自身の回復があり、行なうべきご自身の働きがあります。一つの時代において主が行なっている特別な回復と働きが、その時代の務めです——参照、創 6:13-14。

2. ダビデは彼の時代の奉仕者であり、その時代の務めを持っていました(使徒 13:21-22, 36 前半)。旧約において、ノアは箱船を建造するというその時代の務めを持っており、モーセは幕屋を建造するというその時代の務めを持っており、ダビデとソロモンは宮を建造するというその時代の務めを持っていました。
 3. 時代の務めを持つ時代の奉仕者は、地方性の奉仕者とは異なります。ルターは彼の時代の奉仕者でした。ダービーも彼の時代の奉仕者でした。この現在の時代の務めについて行くために、わたしたちはビジョンを見る必要があります。ミカルはダビデと結婚しましたが、彼女は何も見えていませんでした。彼女は、ダビデの外側の状態を見ただけで、それを我慢することができませんでした。結果として、彼女はついて行けませんでした——サムエル下 6:16, 20-23。
 4. 新約において、主イエスの務めは、キリストのからだとしての召会を建造することです(マタイ 16:18)。主の昇天において生み出された賜物のある多くの人々は、ただ一つの務めを持っています。それは、キリストを供給して、キリストのからだ、召会を建造することです。この建造は、賜物のある人たちによって直接的に完成されるのではなく、賜物のある人たちに成就された聖徒たちによって完成されます(エペソ 4:11-12, 16)。
 5. 神の建造する務めには、それぞれの時代にその務めの中で率先する人たちがいます。どうか主がわたしたちの目を開いて見せてくださいますように。すなわち、わたしたちは人である限り、クリスチャンであるべきです。わたしたちはクリスチャンである限り、この時代の主の務めの中へと入り込むべきです。
 6. 人がその時代の務めを見て、それと接触することができることは、神のあわれみです。しかしながら、人が勇気を出して過去の務めを捨てて、神の現在の務めの中へと入ることは、完全に別の事です——参照、サムエル上 14:1-46. サムエル下 6:16, 20-23。
 7. 時代の務めは、現にある真理を神の民に供給します。Ⅱペテロ第1章12節の「現にある真理」は、「今日の真理」とも訳すことができます。主のあらゆる働き人は主の御前で、現にある真理が何であるかについて尋ね求めるべきです——マタイ 16:18. エペソ 4:15-16. 啓 2:7, 11, 17, 26-29. 3:5, 12, 21. 詩 48:2. 啓 19:7-9. 21:2。
- IV. サウルは神によって選ばれ、サムエルによって油塗られてイスラエルの王となりました——サムエル上 9:1-2, 17. 10:1, 24:

- A. サウルは少なくとも二回、神の言葉に従わず、彼の王職と彼の王国を失いました(サムエル上 13:13-14, 15:19, 23, 28:17-19)。サウルはサムエル記上第 15 章で神に従わなかったとき、実は神に反逆しました。
- B. この章でサムエルはサウルに、「反逆は占いの罪に等しく、不従順は偶像礼拝とテラピムに等しい」と告げました(23 節前半)。占いを実行することは悪霊と接触を持つことです。サウルが神に反逆して行なったことは、この占いの罪のようでした。サウルは神に従わず、事実、神の敵となりました。その結果、彼は彼の王職を失いました。
- C. サウルの悲惨な最期は完全に、彼が神のエコノミーと正しい関係になかったことによりました。神は彼の選びの民の間で彼の王国を建造することを願い、サウルを神のエコノミーの中にもたらしましたが、サウルは神のエコノミーにあずかりそれと協力するのではなく、利己的であり、神の王国を不法に用いて、自分の君主制を建て上げました。サウルは王権の思いで満たされており、それはどのようにして自分の子に跡を継がせるかについての思いも含んでいました——サムエル上 20:31。
- D. このことで、サウルは極みまで利己的で間違っていました。結局、神はサウルを放棄して彼を断ち切り、王国を彼から裂きました(15:28)。サウルは神に放棄されたので、独り残され、みなしごのようになり、困難が臨んだとき何の助けの備えもありませんでした。
- E. サウルの利己主義のゆえに、イスラエルの民はペリシテ人との戦いで敗北し虐殺され、サウルと彼の子たちは殺されました。サウルが自分自身と自分の子のために王国を持つという野心、そしてダビデに対するねたみは、神が約束された良き地に対する享受を取り去り、終わらせました——サムエル上 20:30-34。
- F. サウル、彼の三人の子、彼の武器を持つ者の集団の死は、神に反逆し、彼を不法に用い、彼の敵となった者に対する神の公平な裁きでした(歴代上 10:13-14)。わたしたちはサウルの悲惨な最期から、わたしたちの肉を十字架につけ、わたしたちの利己主義、すなわち私利私欲を否むという学課を学ぶべきです(ガラテヤ 5:24, マタイ 16:24, ピリピ 2:3)。
- G. サウルの恐るべき最期の記録は、神の王国の中で仕えるすべての者に対する強力な警告です。すなわち、神の王国の中で別の働きをしてはならず、王国の中で何の乱用もしてはならないということです。わたしたちはサウルのように、自分自身のために「王国」を建て上げようとはなりません。むしろ、わたしたちはみな唯一無二の働きを行ない、神の王国、すなわち

キリストのからだを建造すべきです——サムエル上 31:1-13。

V. ダビデはサムエルを通して神によって選ばれ、油塗られて、イスラエルの王となりました——サムエル上 16:1, 12-13:

- A. ダビデはゴリアテを殺した後、イスラエルの女たちによって称賛され、サウルよりも高くされました(18:7)、ダビデには、高ぶったり、王職を求めて野心的になったりした気配はありませんでした。ダビデはサウルの迫害の試練の下にいた間、良しとされて正しい人となり、地上で神の王国を確立することによって神のエコノミーを遂行しました。
- B. ダビデはサウルの迫害の下にいたとき、サウルを滅ぼす二度の機会がありました。しかしながら、ダビデはこれをしようとしませんでした。それは、サウルが神の油塗られた者であることで、ダビデが神を畏れたからです。このことは、ダビデが神の王国の中で良い秩序を維持したことを示します——サムエル上第 24 章と第 26 章。参照、ローマ 12:3。
- C. 疑いもなく、ダビデは神の定められた御旨を成就するために、自らのために報復せず自分自身を否むことに関して多くを学びました。それは、彼が神の心になかった人であったことに基づいていました——サムエル上 13:14 前半。
- D. ダビデは、真のイスラエルの子の典型的な模範であって、神によって神の選ばれた民に約束され、与えられた良き地を享受しました。彼は神に信頼し、彼のすべての試練の中で神の主権にしたがって、また神の導きと指示にしたがって神と共に歩みました。ダビデは良き地にとどまって、神の嗣業きようにあずかり、神に仕えることを期待しました——17:36-37, 23:14-16, 30:6 後半-10, 26:19 後半。
- E. ダビデが誠実に神に信頼し、神と共に忠信に歩んだことは、彼を完全に資格づけて高い水準で良き地を享受させ、神の心になう王職にまで至らせ、王国を地上での神の王国とさせました。ダビデは神と一でした。彼のものは神のものであり、神のものは彼のものでした。彼と神にはただ一つの王国がありました。そのような人が、キリストの予表である良き地を極みまで享受しました。
- F. サウルが死んだ後、「サウルの家とダビデの家の間には長い戦いがあったが、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった」(サムエル下 3:1)。ダビデは神の民イスラエルのために、神によって王として堅く立てられ、ダビデの王国は高く上げられました(5:6-25)。さらに、「ダビデはますます大いなる者となり、エホバ・万軍の神が彼と共におられ」ました(10

節)。これは、ダビデには神の臨在があったことを示しています。

- G. どんな事においても主がわたしたちと共におられるという内なる感覚がないなら、わたしたちは注意深くなって、自分の道を再考慮しなければなりません(サムエル上 16:14)。主の回復の中で、わたしたちがどんな事を行なうときにも、主の臨在の感覚に注意しなければなりません。わたしたちはみなこの二つの事柄を顧みるという学課を学ぶ必要があります。すなわち、内側の神の臨在と、わたしたちの環境における外側の確証です(参照、サムエル下 5:11-12)。
- H. さらに、わたしたちはみなダビデから、積極的な面についても消極的な面についても学ぶ必要があります。肉の欲はわたしたちを破壊し得る破滅の要素です。もしダビデのような敬虔な人^{けいけん}でさえ誘惑され得るとしたら、どうしてわたしたちは逃れることができるでしょうか?—サムエル下 11:1-27. 参照、II テモテ 2:22. I コリント 6:13, 18:
1. わたしたちの霊的な追求の到達にかかわらず、わたしたちのだれもがそのような罪を犯す可能性があるのです。わたしたちはこの記述を、神の臨在の中で真剣に読むべきです。この記述はわたしたちに、肉の放縦は重大な事であることを警告します。ダビデはほんの少し見ることによって誘惑され、そして自分自身を抑制し損ないました。
 2. すべての聖徒たち、特に若い人たちは、自分の心を探り、心に固い決意をして、決して肉の放縦の道に行かないようにすべきです(士 5:15-16)。わたしたちは言う必要があります、「主イエスよ、あなたを愛します。あなたが必要です。あなたを受け入れます」。こう言うなら、彼はわたしたちの救い主、ダイナミックな救いとなります。霊なるキリストとして、彼はわたしたちをこの時代の汚れから救い、守り、保護してくださいませ。それは、わたしたちが得た栄光を保つためです。